

新たな感染症に警鐘

京都市政経懇 山本氏、コロナ禍展望

京都市政経文化懇話会の11月例会が24日、京都市中京区であり、感染症に詳しい山本太郎・長崎大熱帯医学研究所教授が「withコロナ社会の見取り図」ウィルスとの共生の視点から」と題して、人類がウィルスとどう向き合うべきかについて語った。

山本教授はアフリカでの感染症対策や国内外での災害救援活動に従事。感染症に関する著書も多数ある。

講演で、コロナ禍の現状について「ワクチンが思ったより早く開発され、出口が見えかかっている」と分析。ワクチン接種が進めば、軽い風邪症状を起こすウィルスとして社会に定着し、収束するのではないかと指摘した。

一方で、近年は新たな感

染症が異常なペースで出現しているといい、「ウィルスはすべて動物に由来する。気候変動や森林伐採が進み、動物と人との距離や関係性が変わったのでは」と警鐘を鳴らした。

感染症と文明の歴史も振り返り、中世ヨーロッパで流行したペストが封建制解体やルネサンスといった社会変革を早めたことを指摘。同様にコロナ禍が急速に社会のIT化を進めていると説いた。

感染症流行で社会的距離が求められたが、今後も新たな感染症が出現することは必至とし、「人と人がどうやってもう一度つながりを築くか、地球環境問題ともリンクさせて考える必要がある」と語った。

(目黒重幸)



「人が自然の一部である限り、感染症はなくなる」と語る山本太郎教授(24日、京都市中京区のホテル)＝撮影・増山遼